

マモンはヒマつぶしに内観と自問自答を続けた。

導き出された答えは、自分は伊吹を大事にしたい。大事にしたいけど今まで女を大事にする機会なんてなかったから戸惑っている。目を開け大きくため息をつく、今まで横暴で男も女も関係ないとばかりにノリで扱っていた自分の過去を後悔した。シーツのしわが目に入る。

半地下にある大きなこのベッドで伊吹と横になれる日が来るのを待ち望んでいながらその日はないということに自覚する自分。そんな自分に気が付くと、妙なむなしさと悲しさが同時に訪れ、より一層マモンをさみしい思いにさせた。

(こんな時お金ちゃんが手に入ればな・・・)

マモン持ち前のハングリー精神は一時的に低下しているが、さみしい感情を埋めるためには金が必要だった。マモンはごろりと仰向けになると、今度モデルの仕事での報酬がいつになるのか?というのを思い出した。

今回はいつもより仕事をしたから報酬もたくさん来るはずだ。

(お金ちゃん・・・)

金のことを考えている間マモンの頭の中からは伊吹のことが消え去る。

はずだったのだが、ゴールドヘルファイアイモリ・シロップの影響なのか、今日に限って伊吹の影がちらついた。影はじよじよに具体的な形となりとうとう性行為をしている最中の伊吹となった。

女性経験の豊富さが影響し、衣服越しに見える胸の大きさを推測で再現されている。

自分の体の上にまたがり、女性上位であえぐ伊吹の姿を想像で眺めているとマモンは自分のペニス反応し始めたのを感じた。あつという間に勃起したペニスはここでは狭いとポトムの中で窮屈そうに膨張する。

(・・・くそ)